

[分かち合う世界へ]46、タリバン全否定の前に

アジア自立支援機構代表理事・小沼廣幸

2021/09/05 16:01

先月、タリバンが再度アフガニスタン全土を制圧したという衝撃のニュースが走った。アメリカの完全撤退の動きに呼応して、タリバンの首都カブールへの侵攻と政権の掌握はあっという間で驚くほど早かった。

米軍に鍛え上げられたはずのアフガン国軍兵士たちは、ほとんど無抵抗な状態でタリバンに降伏し、前大統領はいつの間にか国外へ逃亡していた。一体アメリカ軍は20年もの間何をしていたのか。アフガン人が自分たちの力で自国を守る軍事力を築くことを目指していたのではなかったのか。アフガン国軍兵士たちは同じアフガン人であるタリバンと戦い、血を流すことを避けたのだろうか。ベトナムで懲りたはずの軍事力によるアメリカの介入は、またしても大失敗をしたといえる。

世界の人道支援の表舞台となったアフガンには、過去20年もの間、巨額の援助や支援物資が流れ込み、多くの雇用を生み出し、賄賂や汚職が横行した。それにより利益を得る者と、そうでない者との間で大きな格差が生じた。

タリバンはこうした海外からの援助の利益を受けるアフガン人たちに嫉妬心や大きな敵対意識を抱いていたと言っても過言ではない。援助の恩恵にあずかれず、貧困に苦しむ地方の農民たちがタリバンを陰で支援したり、大使館や援助事業で働いていたアフガン人たちがタリバンの報復を恐れて海外に逃亡したりするのはこうした背景があることを忘れてはならないだろう。

私は国連食料農業機関(FAO)ローマ本部勤務時代の1989年から約7年間、アフガンの担当をしていて年に数回、出張した。当時はまるで日本の戦国時代の様相で、何人もの戦国武将(ムジャヒディン)たちがそれぞれ異なる地域で勢力をしのぎあっていた。

その中で、首都カブールとその周辺を制圧していたナジブラ大統領率いる共産主義政権がアフガン政府を擁立していたが、ソビエト連邦軍が撤退した同年ごろからムジ

ヤヒディンたちとの交戦の激しさが増した。カブールにロケット弾が毎日のように撃ち込まれ、滞在中の私は、防空壕(ごう)に避難したことが何度もあった。そうした中、イスラム原理主義を唱えるタリバンが勢力を増し96年、今回と同じように急速に首都カブールと国土の大半を制圧し、「アフガニスタンイスラム首長国」を樹立した。

アフガンは世界全体の8割近いアヘンの原料となるケシの花の栽培面積を有することで有名だが、タリバンによるケシの花栽培禁止令の下、その栽培面積が10分の1以下に激減したことがあった。長くは続かなかったが、それまで誰もができなかった快挙をタリバンが成し遂げたのは事実だ。また、イスラム法により女性の社会進出が厳しく制限されていたが、何度もの話し合いの結果、女性獣医師局の開設が認められ、女性獣医師たちによる女性の農民たちへの支援が認められた。

これらは例外的な事例だが、タリバンのすべてを否定し、敵対視する前に、知っておく価値があるだろう。ソビエトやアメリカなどの大国のエゴに何十年もの間、翻弄(ほんろう)され続け、国や民衆の心が分断され、その末にたどり着いたタリバンの制圧。これからどうなるのか、予測をつけがたいが、そこに暮らす貧しい人たちへの人道支援を最優先に対処してほしいと思う。

<こぬま・ひろゆき> 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士(農学)。元国連食糧農業機関(FAO)事務局長補兼アジア太平洋局長。元明治大学特任教授。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人(非営利)アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。